

## 論文

# 父親の量的関わりが 大学生の自尊心に与える影響<sup>1</sup>

玉 宮 義 之

小 貫 胤 羽

The influence of father's involvement on self esteem  
in university students.

TAMAMIYA Yoshiyuki

ONUKI Kazuha

### 1 はじめに

近年の親子に関する研究では、子どものあらゆる性格特性と親子との関係に着目した研究が多くなされており、親の養育が子どもの性格特性や内面的成長に何らかの影響を与えていることが明らかにされている。例えば、親の養育態度が子どもの無気力に与える影響については、男性の場合は、父親の十分な養護が子どもの無気力を抑制し、母親の十分な養護が日常的な意欲を促進する一方で、女性の場合は、無気力の抑制には親の養育態度以外の強い影響が指摘されている(林, 2015)。渡辺(2011)によると、親の情緒的不支持・非受容的な養育態度は、子どもの無価値感・不安定さ・

---

1 本研究は、第二著者が2020年度に白鷗大学教育学部の卒業論文として提出した論文を第一著者が再編集したものである。

過度の敏感さに正の影響を与えていると言われている。しかし、親の養育と子どもの性格特性や内面的成長を対象にした研究の中でも、両親もしくは母親に着目しているものは多く取り上げられているものの、父親のみを取り上げた研究はまだ少ない傾向にある。父親自身が、どれほど父親としての意識を有しているかという父親認識に関する文献の動向について調査したデッカー・丸山(2015)によると、2001～2012年の間、父親認識に関する文献は年々増加傾向にあるとされている。父親認識に関する文献が増加傾向にあることの背景としては、時代の変遷に伴い変化していく家族システムの中で、家族の在り方、特に父親の存在について問われるようになったこと(デッカー・丸山, 2015)や、日本の遅れた男性の育児参加を背景に、働く男性の育児参加を促し、育児休業を取得することや、夫婦で協力して育児をする環境を目指すことを目的に、厚生労働省によって2010年6月に「イクメンプロジェクト」が立ち上げられたことなど、父親の育児参加を促すような現代の日本の社会的風潮や流れがあるためではないかと考えられる。しかし、父親の養育態度、さらには子どもが幼児期以降の父親に着目した研究は少ない現状にあることから、父親の養育・育児を対象にした研究を行い、父親の育児参加で得られる効果や科学的根拠を明らかにしていくことで現代の社会的風潮に伴い、父親の育児参加を促すことにつながると考えられる。

親の養育態度は、「質的関わり」と「量的関わり」として大きく2つに分けて捉えることができる。子どもへの関わりを接触頻度や時間的な長さなどの量的な側面で検討するのは一般的な傾向である(秋光・村松, 2011)。さらに、Lamb(1976 久米・服部・小関・三島訳, 1981)によれば、量よりも育児の内容や質の方が、子どもに対する影響が大きいということが述べられている。したがって、親の養育態度を扱う場合、接触頻度や時間等の「量的関わり」では捉えられない、子どもの内面的成長や理解、精神的関わり等に重点を置いた「質的関わり」での測定がふさわしいと考えられる。一方で、父親と多く接している子どもは、父親との交流が少な

い子どもに比べて、判別能力や感情理解能力が高い (Nakagawa・Lamb・Miyake, 1989) という結果も得られていることから、「量的関わり」か「質的関わり」かのどちらに焦点を当てるかについて、さらに吟味する必要がある。木田 (1981) は、父親と母親では量的な育児参加に根本的に大きな差があることや、親子間の安定した一定の接触を確保するためには量的関わりが必要であること、子どもと接触時間の短い父親にとっては育児参加の量的な増大が質の向上をもたらすという根拠を基に、父親の育児参加において「量的関わり」を重視している。子どもと量的に関わる時間を確保することができれば、質的にも関わるができるという根拠を基に、「質的関わり」を調査する前段階として、父親の「量的関わり」が子どもにどのような影響を与えるのかを明らかにすることは必要不可欠である。厚生労働省(2010)により、量的関わりに焦点を当てた「イクメンプロジェクト」が立ち上げられたことや、今日の日本の社会経済や働き方、現代の父親の育児参加に対する社会的風潮に則り、本研究では父親の「量的関わり」の子どもへの作用を検討する。なお、本研究における量的関わりの定義は、秋光・村松(2011)の「時間や回数等の頻度でカウントできる関わり」という定義に加え、「子どもの内面の成長や作用までは考えていない、育児参加自体に重点を置いた関わり」とする。

また、子どもの性格特性のうち、自尊心に影響する重要な他者として、家族や友人との関係がしばしば取り上げられている。発達過程にある子どもにとって、家族関係や友人関係は、子どもの自尊心に強い影響を及ぼし、特に親からの支持が子どもの自尊心に影響を与えているという結果が得られ、つまり子どもの自尊心の安定には、友人関係における自尊心、家族関係における自尊心、全体的自尊心の3つの自尊心のうち、家族関係における自尊心が重要な核となっているということが明らかにされている(加藤・西, 2010)。親からの否定的な言葉と自尊心の関連について検討した野村・福井(2008)によると、母親からの否定的な言葉と父親からの干渉するような言葉は、子どもの自尊心の発達を妨げ、低くするということが明らか

にされており、子どもの自尊心の発達には、親や家族との関連が強いと考えられる。自分に満足し、安定的な自尊心を保持することは、子どもの精神的健康に繋がると考えられてお(菅原・伊藤,2006)、自尊心は児童期に高く、青年期に低下し、成人期に上昇し続け、50,60代頃にピークを迎えて、その後低下するという結果が得られている(e.g., Orth & Robins, 2014)。では、成人形成期に該当する現代の大学生の自尊心はどうだろうか。

大高・唐沢(2015)によると、大学生は成人形成期にあてはまる時期であると言われている。成人形成期は青年期に続く発達段階として Arnett(2000)によって新たに提唱されたもので、具体的には18～25歳の時期に該当する者を指す。成人形成期の親子関係に関する研究では、親に対する肯定的態度が子どもの情緒的自立を促進することが明らかになっている(Leondari & Kiosseoglou, 2000)。成人形成期の子どもの社会化において、父親は、子どもの社会化の後期課程に当たり、子どもを家庭外の社会へ自立させる役割を担う(Parsons & Bales,1995 橋爪・溝口・高木・武藤・山村訳 1970)。つまり、子どもが社会へと自立するためには、父親との関わりが重要な役割を果たしていると考えられる。成人形成期に該当する大学生は、生まれた家庭や学校を離れ、社会の一員となる準備期間であると考えられ、この時期に親からの自立を行うことが重要であると考えられる。Orth & Robins(2014)の研究成果に沿って考察すると、子どもの自尊心が上昇する時期である成人形成期も発達過程にあると考えられ、この時期の自尊心の発達に、親の養育態度との関係があると考えられる。

荻原・楠(2018)によれば、自尊心は青年期で低く、成人期から高齢期まで増加し続けているということが明らかになっており、成人期から自尊心が高まる背景には、社会に出て職を持ち、自分の仕事にやりがいを感じたり、取り組みを認められるようになったり等、自信がつく経験を多く重ねることにあると考えられる。自尊心育成の社会的成果に関する研究が米国では多く行われてきた(木村, 2013)ことから、成人形成期において、自尊心を高めておくことで円滑に社会化を行い、親からの自立を目指すこと

ができると考えられる。また、杉森(2019)によれば、日本人は、自己の欠点などを見出して改善しようとするため、欧米と比較して自尊心の得点はやや低めに出やすいと報告されている。さらに、日本従来への謙譲の美徳により、自分を低めて相手を上げ合うことでお互いに自尊心を高め合うということも報告されている(杉森, 2019)ことから、自尊心について調査すること自体が、個人の自尊心を高めることにつながる可能性があると考えられる。本研究において特定の性格特性で自尊心を扱う意義は、以上にあると考えられる。

全国大学生生活協同組合連合会(2019)によって行われた、全国の国公立および私立大学の学部学生10,832人を対象とした第55回学生生活実態調査では、大学生の居住形態は自宅が48.7%、自宅外が51.3%と報告されている。自宅外通学者は、自宅外の生活を始めてから、父親との関わりが自宅通学者と比較して少ないことが予測できる。本研究では大学生を対象とするが、居住形態における調査への影響を考慮しない場合、自宅通学者と自宅外通学者との間で父親との関わりに根本的な差が生じてしまうため、どちらかを調査対象から除外しなければならない。そのため、居住形態による調査への影響を考慮し、父親との量的関わりは、自宅外での生活をしていない可能性が高い、青年期後期までを想起して回答する形で行う。

よって、本研究の目的は、青年期後期までの父親からの子どもに対する量的関わりは、現在の大学生の自尊心にどのような影響を与えているのかについて検討することにある。

## 2 方法

### 対象者

18~20歳までの白鷗大学の学生106名(男性37名、女性69名)にGoogleフォームによる調査を実施した。そのうち、調査の対象にならない者や、重複したデータを除いた102名(男性36名、女性66名)を分析対象とした。

分析対象からの除外の基準は、父親に関する記憶や同居期間が特に少ない者と設定した。平均年齢は19.3歳であった。

## 質問紙

本調査では、フェイスシートとして「1.性別」、「2.年齢」、「3.父親に関する特別な事情」を訪ねた。3.については非必須項目で、特別な事情がある人のみ、記述での回答を求めた。質問紙は、(1)ローゼンバーグの自尊感情尺度日本語版の検討(桜井, 2000)と(2)父親の関りが児童期の社会性に及ぼす影響(秋光・村松, 2011)それぞれで作成された2つの尺度で構成した。

ローゼンバーグの自尊感情尺度日本語版は、「1.私は自分に満足している」、「2.私は自分がだめな人間だと思う(R)」、「3.私は自分には見どころがあると思う」、「4.私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる」、「5.私には得意に思うことがない(R)」、「6.私は自分が役立たずだと感じる(R)」、「7.私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う」、「8.もう少し自分を尊敬できたらと思う(R)」、「9.自分を失敗者だと思いがちである(R)」、「10.私は自分に対して、前向きな態度をとっている」の計10項目で構成されたものである。このうち、逆転項目は(R)で示した5つの項目が対象である。質問は、「いいえ」から「はい」の4件法で回答を求めた。

父親の関りが児童期の社会性に及ぼす影響(秋光・村松, 2011)は、小学3, 4年生の子どもをもつ家族6組に調査し、小学校中学年の子どもをもつ父親の質的な関わりと量的な関わりの内容を、半構造化面接により明らかにし、9カテゴリー42項目で作成されたものである。本研究では、父親の量的関わりについて扱うため、父親の量的関わりの測定項目として作成されたものを使用した。秋光・村松(2011)では、父親視点での質問になっていたため、子ども視点の仕様に変更した。回答項目は「1.生活の中で1人でできないことを手伝ってもらった」、「2.風呂に入ったりテレビを見た

りするなど、一緒に過ごしてくれた」、「3.話す時間を確保してくれた（一日の出来事・冗談・テレビの話など）」、「4.勉強や分からないこと、調べ方などを教えてくれた」、「5.よく声をかけてくれた（「おはよう」「おやすみ」など）」、「6.日々の生活の中で、私（僕）のために食事の用意をしてくれた」、「7.私（僕）に自分（父）の仕事の話をしてくれた」、「8.言うてはいけないことや、してはいけない事などの言動について注意された」、「9.子どもが巻き込まれる事故や事件に関心をもち、私（僕）に注意した」、「10.家での決まりややくそくを守らされた」、「11.学校行事に参加したり、習い事の発表会や試合を見に来てくれた」、「12.私（僕）と外で一緒に遊んでくれた」、「13.家族で出かけるなど、家族で過ごす時間を確保してくれた」、「14.私（僕）の友達や近所の子どもと一緒に遊んだり活動したりした」の計14項目を使用した。質問は、「なかった」から「かなりあった」の4件法で回答を求めた。父親の量的関わりについては、秋光・村松（2011）の因子分析の結果に基づき、「世話」、「しつけ」、「共行動」の3因子とし、それぞれの因子に該当する質問項目は、「世話」が1～7、「しつけ」が8～10、「共行動」が11～14であった。

## 手続き

調査は11月に行った。調査はGoogleフォームによるオンライン実施であった。同意書には、参加は自由意志であること、進行途中で参加を中止しても構わないこと、プライバシーに関することは公開することがないということに記載した。参加者には、同意していただける場合は、署名は求めず、そのまま回答を進行してもらった。性別、年齢、父親に関する特別な事情に関する項目、自身の自尊心に関して尋ねる項目、父親の量的関わりについて尋ねる項目の順に回答してもらった。なお、自尊心に関しては現在の自身の自尊心の程度、父親の量的関わりについては、青年期後期（高校生時代）までを想起して回答してもらった。どちらも回答者の視点で、4件法で尋ねた。

分析には、IBM SPSS Statistics 25 を使用した。

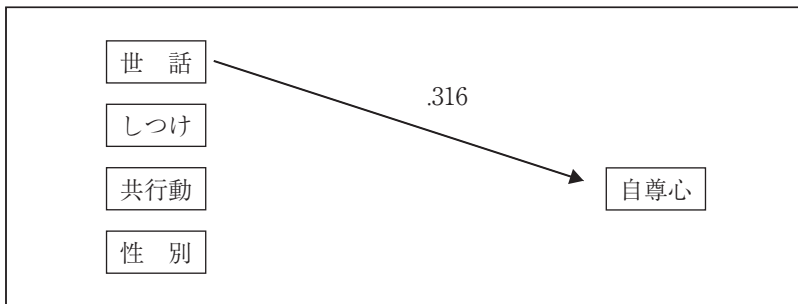
### 3 結果

Google フォームの回答から、自尊心に及ぼす影響について、説明変数を父親の量的関わり、性別、目的変数を自尊心として、強制投入法による重回帰分析を行った。自尊心については、逆転項目を正し、平均値を算出した。以下、量的関わりにおける「世話」、「しつけ」、「共行動」と「自尊心」の標準偏差と平均値を Table1 に示した。

Table1. 量的関わりにおける「世話」、「しつけ」、「共行動」と「自尊心」の標準偏差と平均値

	世話	しつけ	共行動	自尊心
平均値	2.75	2.81	2.77	2.65
標準偏差	.74	.87	.76	.22

父親の量的関わりの、「世話」、「しつけ」、「共行動」のうち、父親の「世話」の量が多いほど、子どもの自尊心は高まるという結果になった ( $\beta = 0.316, p < .05$ ; Figure1)。



$R^2 = -.002$

Figure1. 重回帰分析の結果。有意なパスのみ、標準偏回帰係数を示す。

性差を検討するため、量的関わりの各変数と自尊心を従属変数とした T



検定を行った。その結果、量的関わり・自尊心において性別による有意差は得られなかった (table2)。

Table2. 性別での各変数の平均値

	世話	しつけ	共行動	自尊心
男性	2.73	2.79	2.76	2.64
女性	2.75	2.82	2.78	2.78

#### 4 考察

本研究の目的は、青年期後期までの父親の量的関わりは、現在の大学生の自尊心にどのような影響を与えているのかについて検討することであった。調査にて、男女に回答を求めていたので、父親の量的関わりそれぞれの因子と自尊心に関して、性差での検討も行った。その結果、父親の量的関わりの「世話」、「しつけ」、「共行動」のうち、「世話」のみ有意差が見られた。そのため、父親の「世話」の量が多い程、子どもの自尊心が高まるという結果になった。

父親の量的関わりのうち、「世話」に有意差が見られたこととして、小学校低学年を対象に父子交流活動が子どもに与える影響について検討した擢・奥園 (2010) は、父親が子どもと一緒に遊んだり、勉強したりするような活動を行う頻度が高い程、子どもの非依存性や自己管理などの多側面への肯定的な影響があるという結果を得ている。平山 (2001) によれば、父親の家庭関与の少ない子どもの精神的健康度は、父親の家庭関与の多い群と比較して、男女ともに低いという結果が得られているように、父親との関わりが多い、また、父親が育児に積極的である場合、子どもの多側面の発達に肯定的な結果が見られると考えられる。本研究の父親の量的関わりで、一緒に過ごしてくれたことやよく声をかけてくれた、勉強を教えてもらった等、「世話」を構成する項目は、一般的に考えられる量的な接触頻度やコミュニケーションほど曖昧ではないが、それらに該当すると考え

られる。そのため、これまでの先行研究で父親との接触頻度が高いほど肯定的な結果が得られていることから、本研究において父親の量的関わりの「世話」に有意差が見られたと考えられる。

養育態度の期待の高低による青年期の子どもの養育態度認知と内的適応に関する研究を行った信太(2012)によれば、要求性に関する期待値が高いほど、自尊心も高いという結果が表れている。信太(2012)の研究における要求性とは、Baumrind(1983)の養育態度理論を構成する2つの要素、応答性と要求性のうちの1つである。要求性とは、親が子どもの行動を管理し、厳しくしつけるというような態度のことで、本研究における父親の量的関わりの「しつけ」は、養育態度理論の要求性に該当すると考えられる。しかし、本研究では父親の量的関わりの「しつけ」と、子どもの自尊心には有意差が見られなかった。その背景として、著しく「しつけ」に特化した養育を行っている父親が少ないためではないかと推測できる。本研究では、「しつけ」因子が高い程、自尊心が下がるというような結果は出ていないため、父親の量的関わりにおける「しつけ」に該当する行動を行うことによって、子どもの自尊心が必ずしも下がるという結果には繋がらない。反対に、自尊心が高くなるという結果が見られているわけでもないため、むやみに厳しい養育を多くしてもかまわないという解釈をしてはいけないとも言える。

本研究において、「共行動」での有意差が見られなかったことの背景には、子どもが父親の共行動に該当する行動を、意味のあるものとして認知していない可能性があるためではないかと考えられる。具体的に、学校行事に参加したり、発表会や試合を見に来たりしたという行動は、普段から積極的に参加してくれるような父親を持つ子どもの場合には、当たり前のことと感じてしまい、自分にとって得られることが少なく、子どもの発達に直接影響しないのではないかと推測できる。また、自分の父親が近所の子どもと遊んでいた記憶や経験は、幼少期の頃が多いと推測できるが、幼い頃はその行動が何を意味するのか、自分にとって得られるものは何かを

正しく理解できておらず、単に近所の子どもとも仲良くできる父親であるという認識に留まってしまう可能性が高い。子どもの、父親の育児参加に対する認知が、実際の父親の育児参加の影響よりも強い効果を示している(石井, 2004)ことや、子どもが親の養育をどのように捉えているかが子どもの自尊感情に影響を及ぼす(小玉, 2010)ということが明らかになっていることから推測できるように、子ども自身の父親の育児参加への認知によって、効果に差が生じてしまうと考えられる。

また、一般に、父親は娘に対して甘く、息子に対しては厳しく関わるというようなイメージがあるが、秋光・村松(2011)の調査で、父親の子どもへの関わり方には、子どもの性別による差異は大きくないということが明らかになっており、本研究においても性別による父親の量的関わりやそれによる自尊心の差はみられなかったため、今回の調査結果から、現代の父親は、子どもの性別によって関わり方や接し方を変えないということも主張できる。阿部(2018)によれば、娘は父親との関わりにおいて、父親を感じさせる言動や一日の出来事を話すことなどには嫌悪感を示しにくく、男性を感じさせる言動は嫌悪感を高めるとということが明らかにされている。本研究では、会話の内容までは特定していなかったため、先行研究のような結果が表れたわけではないが、これまでの先行研究で、娘との関係や父親に対する嫌悪感に関するテーマがしばしば扱われており、世間一般的に、父親と娘は相性が比較的良好傾向にないと思われがちである中、本研究で各変数に性差が表れなかったことは、近年の父親は性別によって子どもを差別していないと捉えられるため、性差別やジェンダーにおける問題が題材に挙がる世の中において、今回の結果は良い傾向なのではないかと考えられる。

自尊心の発達に影響のある要因として、幼少期には親や兄妹などの家族が主な関わりのある対象のため、家族が自尊心の発達に及ぼす影響は大きいと予想できる。しかし、子どもが成長するにつれて、自尊心だけでなく、各性格特性の発達に影響を与える要因は、友人関係や学校環境、さらには

学校教師など、親以外の大人と関わる機会も増え、成長していくにつれて多様化していくと推測できる。中澤(2011)は、子どもの発達に関して、父親は単一の大きな影響要因となっているのではなく、他の要因と関連しながら影響を持つことを示していると考察している。中澤(2011)の研究結果を踏まえると、本研究では、自尊心に関して現在の程度を尋ねていたもので、調整済みR<sup>2</sup>乗の値が-.002であったことから、既に、父親の量的関わり以外の様々な要因によって、自尊心が構成されていると推論できる。

本研究において、父親の量的関わりが、自尊心に対して少なからず影響しているという結果が得られたことは、子どもの人格形成に父親の養育が関係しているということを示唆しており、父親の育児参加を促す根拠になりうると考えられる。

今後の研究課題としては、先に述べたことを踏まえて、自尊心を測定する際に、独立変数以外の要因が影響していることも考えて測定することが求められる。さらに、今回父親の量的関わりを想起する範囲を青年期後期までとしたものの、父親に関して特別な事情があり、幼少期の記憶しかない回答者も複数いたが、全体での分析を行ってしまったために、顕著な結果が表れなかった可能性も考えられる。そのため、今回のように父親の量的関わりを想起する範囲を、青年期後期まで幅広く指定せず、さらに範囲を狭めて調査することによって、想起する記憶の程度の差を少なくすることができるのではないだろうか。また、本研究では、性差も現れる可能性があるのではないかと念頭に置いて分析したものの、実験参加者の男女比に偏りがあったので、性差の結果が信頼性の高いものではなくなってしまった。そのため、母集団に偏りが表れないよう、調査を行うことが求められる。今回、調査の際に、父親に関する特別な事情がある場合は記載してもらったが、記載してもらった分も合わせてほとんどの参加者は、父親と幼少期や児童期ならば、確実に父親と関わっていたということが予測できる。しかし、実際には、世話もしつけも共行動も、それらに当てはまるような行動を父親がしていたのにも関わらず、幼い子ども側からしたら、

その記憶は曖昧になってしまった可能性もある。特に、幼少期の頃しか父親と関わっていない場合は、想起する場面がかなり前の出来事で限定されてしまい、想起の明確さや父親の量的関わりを正しく認知できていなかったために、それらの回答と、父親の量的関わりを明確に想起・認知できていると考えられる回答の間で信頼性に差が生じ、信憑性の高い記憶・回答ではなくなってしまった可能性が高い。なお、今回は、社会に出て役に立つ自尊心は、家族関係の自尊心のみではないと考え、全体的自尊心に属するローゼンバーグの自尊心尺度を用いて検討した。しかし、家族関係における自尊心が重要な核となっているということが明らかにされている(加藤・西, 2010)ことから、加藤・西(2010)のように、友人関係における自尊心、家族関係における自尊心、全体的自尊心の3つの自尊心について検討できる尺度を使用すれば、父親の量的関わり、子どもの自尊心に対する効果が顕著に表れた可能性も考えられる。今後は、これらの研究課題も考慮して、さらに検討していく必要があると考えられる。

## 5 引用文献

- 阿部洋子 (2018). 娘の父親に対する嫌悪感と父親の魅力との関係 感情心理学研究, 26, 11.
- 秋光恵子・村松好子 (2011). 父親の関わりが児童期の社会性に及ぼす影響 兵庫教育大学研究紀要, 38, 51-61.
- Arnett, J. J. (2000). Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American psychologist*, 55, 469-480.
- Bales, R. F., & Parsons, T. (2014). *Family: Socialization and interaction process*. routledge.
- デッカー清美・丸山昭子 (2015). 父親認識に関する文献研究 日本農村医学会雑誌, 64, 718-724.
- 荻原祐二・楠見孝 (2018). 日本における自尊心の発達の軌跡 感情心理学研究, 26, 3.
- 林雅子 (2015). 親の養育態度が若者の無気力に与える影響の検討—親と子どもの性別による養育態度の違いに着目して— 日本心理学会大会発表論文集 *日本心理学会第79回大会*, 1176.
- 平山聡子 (2001). 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連—父母評定の一尺度からの検討— 発達心理学研究, 12, 99-109.

- 石井クンツ昌子 (2004). 父親の子育て参加と就学児の社会性に関する日米比較調査家族社会学研究, *16*, 83-93.
- 加藤佳子・西敦子 (2010). 小学生の家族関係および友人関係における自尊感情と全体的自尊感情との関連 日本家政学会誌, *61*, 741-747.
- 木田淳子 (1981). 父親の育児参与と幼児の発達に関する調査研究—共働き家族を対象に— 滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学, *31*, 79-97.
- 木村松子 (2013). 自尊心の高い「社会人」の育成に関する検討課題 学校教育研究, *28*, 58-70.
- 小玉陽士 (2010). 親の養育スキルが子どもの自尊感情に及ぼす影響 —子どもの認知に焦点を当てて— 日本教育心理学会総会発表論文集 第52回総会発表論文集, 321.
- Lamb, M.E. (1976). *The role of the father in child development*. New York: Wiley. (ラム, M.E. (著書) 久米稔・服部広子・小関賢・三島正英 (訳) 1981 父親の役割 乳児とのかかわり 家政教育社)
- Leondari, A., & Kiosseoglou, G. (2000). The relationship of parental attachment and psychological separation to the psychological functioning of young adults. *The Journal of social psychology*, *140*, 451-464.
- NAKAGAWA, M., LAMB, M. E., & MIYAKE, K (1989). ストレンジ・シチュエーションにおける日本の乳児の心理的体験 乳幼児発達臨床センター年報, *11*, 13-24.
- 中澤潤 (2011). 父親の養育参加が子どもの発達に及ぼす影響 日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第75回大会, 1033.
- 信太寿理 (2012). 青年期前期の養育態度認知と内的適応—養育態度の期待の高低から— 日本青年心理学会大会発表論文集, *20*, 42-43.
- 野村早也佳・福井義一 (2008, September). 親からの否定的な言葉が自尊感情や愛着型, 社会的スキルに及ぼす影響 日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第72回大会, 1263.
- 大高瑞郁・唐沢かおり (2015). 成人形成期の子どもへの父親に対する態度を規定する要因: 父親からの行動に関する子どもの認知に着目して 社会心理学研究, *31*, 89-100.
- Orth, U., & Robins, R. W. (2014). The development of self-esteem. *Current Directions in Psychological Science*, *23*, 381-387.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, *12*, 65-71.
- 菅原正和・伊藤由衣 (2006). 児童期の母子関係が青年期の自我形成に及ぼす影響—自尊感情 (Self Esteem) と対人不安を中心として— 岩手大学教育学部研究年報, *65*, 31-44.
- 杉森伸吉・小塩真司・古莊純一・伊藤美奈子・山崎勝之 (2019). 本物の自尊心を育てるために教育心理学年報, *58*, 351-362.
- 耀宇華・奥園淳子 (2010). 父子交流活動が小学校低学年の子どもに与える影響について (口頭セッション 4 親子・愛着) 日本教育心理学会総会発表論文集 第52回

総会発表論文集, 244.

渡辺弘純 (2011). 大学生の自己愛傾向と親の養育態度・社会的比較志向性との関連日本心理学会大会発表論文集 日本心理学会第75回大会, 149-156.

(本学教育学部准教授)

(上越教育大学大学院修士課程)